

研究代表者 所属・職：全学教員センター・助教

氏 名：高村秀史

研究課題名：美浜町における災害発生時の災害支援拠点、避難所生活に向けた支援 —アウトドアのノウハウを活かした体験型『防災・減災キャンププログラム』の構築—

研究の目的

■2017 年度に構築・実践を行った「防災キャンププログラム」から、キャンプの力が防災・減災教育に非常に有用であることが示唆された。2018 年度の研究実践では、内容のブラッシュアップとともに、知多半島という地域性を考慮した内容を取り入れるための検証や、防災キャンプ指導者への実践を行い、プログラムの点検・評価を行う。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

- 1. 知多半島の地域特性のあったプログラム内容の検討
 - 1.1 これまで、大きな自然災害を体験したことのない知多半島の学生と、東日本大震災を経験した岩手県の学生を対象に防災キャンプを実践。それぞれの違いを検証した。
 - 1.2 愛知県教育委員会が開催した「防災キャンプ指導者宿泊研修会」に講師として参加し、防災教育の指導者の考え方やニーズを検証した。
- 2. プログラム内容をブラッシュアップするための実践と検証
 - 2.1 FieldStyle2018 に防災ブースを出展し、火おこしワークショップを開催。アンケートデータの収集やインタビューを行い、プログラムを検証した。
 - 2.2 2017 年度に引き続き、潜在看護師研修の防災キャンププログラムに講師として参加。前年度より変更したプログラムを検証した。
- 3. プログラムの社会還元(パネルの作成)
 - ・防災・減災学習用のパネルを作成し、防災キャンプやイベントで展示。研究成果の社会還元をおこなった。

優れた成果があがった点

- ①知多半島の地域特性に合った防災キャンププログラム傾向の判明
 - ・大きな自然災害を体験したことのない知多半島の学生と、東日本大震災を経験した岩手県の学生に対するアンケートやヒアリングをおこなった結果、「災害に対する意識の違い」「共助力を高める目的の防災・減災教育が多い」「避難所依存の強さ」等の傾向が判明した。得られた知見から「避難所運営の一員としての自覚意識の育成」「自助と共助を連動して考える」ためのプログラムが必要であることが判明した。
- ②「やってみたい」を引き出すプログラムの策定
 - ・本研究で考えるプログラムは、キャンプ力が防災・減災につながるという考えから、防災・減災活動に縛られず、参加者に「キャンプをやってみたい」という意識が芽生えることでも目的が果たせたと考えられる。プログラムは概ね好評で、今後の方向性を得ることができた。

研究期間終了後の今後の展望

- 知多半島は、地理的条件から災害発生時の救援活動開始が遅くなることが推察される。まずは、知多半島内でプログラムを展開したい。しかし、2 年間の実践研究を通して他地域でのニーズも多いことが判明した。今後、他地域においても地域性を考慮したプログラムの検討・展開を進める。
- 以下の内容を考慮しつつ、引き続き実践・検証を継続する。
 - ①「自助力から共助力につながる」プログラム

の策定・展開

②アウトドアの要素を多く取り入れ、「やらなき
ゃからやってみたいへ」をテーマに受動的意
識から能動的意識への転換を図る

今後は、本学学生・教職員の参画も得ながら、
広く防災キャンプを実施できる体制づくりも
重要な課題であるといえる。